



◀南阿蘇村の仮設住宅にも
集落支援員として顔を出す北里さん



女性の参加も多い「復興むらづくり協議会」の様子

特集
女性と復興

南阿蘇の復興に向け 共に立ち上がる、 地域と住民をサポート



北里 かりさん(48)

阿蘇郡南阿蘇村(旧長陽村)生まれ。興立大津高校を卒業し、九州造形短期大学デザイン科へ進学。卒業後、サービス業、建設業を経て、1998年に南阿蘇村で開業。熊本地震後、ボランティアの受け入れ拠点づくりに携わる。2017年4月から同村復興推進課集落支援員。

美しい南阿蘇の風景が 別世界に

熊本地震後、阿蘇郡南阿蘇村長野の自宅が全壊という極限の状況下で、気持ちを奮い立たせ、全国から集まるボランティア受け入れの拠点づくりに尽力した北里かりさん。2017年4月からは集落支援員として、被災集落の支援に力を注いでいます。自身も被災者の一人でありながら、南阿蘇の復興をサポートする北里さんの活動の様子と、南阿蘇の「今」を取材しました。

1998年に、実家のある南阿蘇村長野地区に開業し、陶芸家として創作活動をしてきた北里かりさん。作家としての仕事の傍ら、南阿蘇一帯でのアートイベントの運営に携わる他、「神楽の里を盛りあげ隊」を立ち上げ、地域の伝統文化「長野岩戸神楽」などを盛り上げる活動を行ってきました。

そのような中で起こった熊本地震。本震が起きた4月16日、「今まで聞いたことのない地鳴りが近づいてきたかと思うと裏山が崩れ落ち、何が起ったのか全く分かりませんでした。暗闇の中、倒れた家具を乗り越えて家族4人どうにか抜け出すことができました」

近隣に住宅がない一軒家。周囲の状況も自分の置かれた状況も分からず、肩を寄せ合い3時間ほどすると、遠くから消防団の方の音が聞こえてきたそうです。放心状態の両親をどうにか説得し、とにかく人のいる場所へ避難。「一時避難し車中泊している間、まったく外の情報が入ってこず、時間だけが過ぎていきました。阿蘇大橋の崩落を初

細やかな心配り忘れず 自分のことができることから

本震から1週間が過ぎると、全国からボランティアが続々と集結。阪神・淡路大震災を経験したボランティアコーディネーターの方がいち早く現場に入り、4月末には、任意のボランティア団体「南阿蘇復興支援センター」が開設され、ボランティアの采配をスタート。「コーディネーターの方は、災害現場での経験はお持ちですが、地元の状況が分からない。県外から力を貸してくれる人がいる。地元住民である自分ができることは…。多くの方の迅速な行動力に心を突き動かされ、私も一緒に支援センターの事務局で活動をする事になりました」

まずは、知り合いの空き店舗を事務所として使わせてもらえるよう交渉するなど拠点を整備。ボランティアの活動現場に同行し、家庭の不用品を処分するため、後々のトラブルを回避するため、持ち主に承諾書を取るなど、必要だと

思ったことは徹底して行いました。

ボランティアとして活動してくれた人の中には、テントで1カ月間生活した女性もいたそうです。「大変な作業の合間に、少しでも心安らいでもらえる空間を作れたら」と事務所をアットホームな雰囲気を整えるなど、北里さんならではの細やかな発想で、できることを一つずつ実践していきました。

山積する復興への課題

北里さんのボランティアとしての活動は2017年2月まで続き、同年4月から同村の集落支援員としてさらに多くの人と関わりながら、生活に踏み込んだ支援をしています。再建に向けて相談を受けたり、支援情報を発信する他、さまざまな復興計画を協議する「復興むらづくり協議会」にも加わり、特に被害の大きかった立野、黒川、沢津野、乙ヶ瀬、長野、袴野の6地域を中心に、復興支援を行っています。

「同じ南阿蘇でも、被害の状況には大きな差があります。家の解体後、村を離れる人も多く、地区によっては限界集落が20年前倒しになったと話す人もいます。地震により何もかもなくなつたゼロからではなく、さらに大きな爪痕が残るマイナスからのスタートという場所もたくさんあります」と北里さん。「そのような地域の人々の暮らしに寄り添い、支援のあり方を見極めながらどう復興の歩みを進めるか、課題が

山積している」といいます。

人々の心と縁をつなぎ 新たな南阿蘇の再生へ

地震発生から間もなく3年を迎える南阿蘇。「地震前には、老人会や青年団の活動が途絶えていた地域がありました。しかし、地震をきっかけに、人の「つながり」の大切さに気付き、活動を再開するなど、新たに動き出した地域もあります」

さらに村役場では復興むらづくり協議会など意思決定の場に、積極的に女性の参加を促すなど、性別や年齢を超えたさまざまな立場の人の声を復興計画に反映させる取り組みも行われています。「本当に大変な災害でしたが、熊本地震を経験したことで、私自身多くの縁をいただき、地域との関わり方もより深くなりました。今私が集落支援員として活動できているのも、周りの方々のサポートがあつてこそなのです」

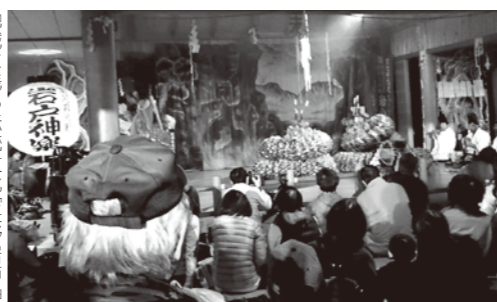
南阿蘇の被災地域が復興を遂げるにはまだまだ多くの月日を要しますが、着実に人々の心をつなぎ、新たな再生へ向け、共に立ち上がる「機運が高まっています」。「南阿蘇にボランティアに来てくださった方々に、今度は遊びにきてもらえるよう、私自身も創作の居場所作りの準備を進めています。復興へ向けた南阿蘇の底力を信じたいと思います。力強い言葉が、南阿蘇の今後を表しているようでした。



南阿蘇の復興の状況をラジオで発信



南阿蘇の現状を知ってもらおうと企画した「南阿蘇・黒川ウォーク」(2018年4月15日)



地域に残る伝統文化「長野岩戸神楽」の地域活性化をサポート



雄大な自然に包まれる南阿蘇の風景。北里さんの大好きな一枚です